

私が繪を構成する色彩に就而

高瀬勝男

黒、私は書を大半黒で扱ひました。

それは黒のなかに含まれた鈍重な無言が私をひきつけたからです、哲學的な、巾と量と重厚さが好きです、沈思とか、黙認とか言ふ、語らざる強さを、美しいとします。私は黒を愉快な時にも、寂しい時にも、こう花果等を書く時にも黒色を失いません、黒は他の色よりも思想的です。

青、小學校の時、青色を非常に愛しました。

空の色コバルトブルーよりブルシヤンブルーの方が好めます、宗教的だつた一九から、二一、二才の時薄くした青を虚無の色として、扱ひました。空色に快哉を叫びましたが、いつしか濃藍が良くなりました。黒と共に、私に取つては必要です。私はこの二色を内面化した精神的な呼應を持つ色と致します。

赤、希望から行動へ、觀念から實踐へ、

休止なき現實の擴充へと昂進する銳角的な最も英雄的な色です。青を混ぜた紫は、不快、苦痛、失望を私に説明するが、赤は力其儘の躍出です。私は赤を抽象的な畫に便じます。それはまことまりのない狂燥な姓慾的な衝動からこさます。

黄、實に余祐のあるダイナミックな旋廻をもつ色、

太陽の如く、求心的な感情の裸形露出です。此の色は誰とも協じます。私は以前から感傷にいたるくせがあります。余り強烈な此の色を私の身邊から遠ざけ様としましたが、無駄でした、黄色は宇宙に満ち満ちてゐます。

群衆の奏く喇叭がこれなのです。私がもし父になつたら吾子にすぐ人間の示として黄色い着物をさせます。

俗堵、癡氣的、世紀末的な個性といふものない様な感じの此の色。

が非常に私の書を調和させます。俗堵は俗堵として、使ひます、どんなに脅やかされた時にでも、私を手引してくれるのはこの色です。白を合へるとロマンチックな言葉を語り、黒と隣りして、なじみ易い安心が覺るます。

藝、第十卷 藝

青の宗教的な父の愛と、黄の本能的な母の愛とに培かれた、縁は邪しまのない健やかな青春期迎へます、自然は春の始から此の色を染め、種々な昆蟲類を養ひます、昆蟲類は縁の内に育つて行くのです、私達はメラノコリーになり、暗な人生を、冷心と靜謐にゆたねるを得るのです。縁は懐かしき故郷です。

グアミリオン（朱）赤よりは進化した近代色です。

物質と物質の距離を示すに私は書面におきますが、多くは使用しません、成可都會人にしたしまれる色、優佳な舞踏と、享樂的な踊りをします。赤よりは紳士的で潔癖家でテクニカンです。火焰を見ると恐怖するが、畫板におかれた朱は黒と藍への間によく調和します、なんだか逢引してゐる氣がします。

黒、藍、黄、赤、壺堵、等が私の作品の基本色です。直線、曲線が實に私の藝術を構成します。

直線

線は色覺により、それぞれの因を含むが、只それらの色に彩をはなれて直線を考察する。直線は建築の原質で点から出發し、限りなく伸長する。直線の運動を地球の引力と原因と結果を飯趨させて、直線は距離と時間を計る私は直線を明瞭なる意義の一義的運動（理知の直接行動）と信じ光の言葉だ、直線は繪畫に現わされる場合、主觀の潤達な擴充がある。直線は曲線よりも内証する響だ。

曲線

音樂の形態が曲線の組織であり、曲線は情緒的だ。曲線の反覆を數理學的に音程となし風に調しなぞらう音樂の自然描寫が繪畫よりも効果的なのは、曲線がむしろ詩なのだから、

私は私の書をものするに色には拘束されたい積りでゐます。思想や感情の急激に移行すべき藝術は觀念的でもないけなければ、モデルに支配されてもいけません。いつも新しく見、いつも細かく見、たへず嚴肅なる心持を保たねば眞でありません。想と客觀が、私をして純粹な何物かに觸れしめます。其處から私は私の藝術を自主的に決定するのです。

（未完）

(2)

あるエトランゼ

久保田ジョウ

佛具に沈む赤陽は
懐しい希望の色だつた
一九三〇年の
一月元旦の夕暮時
綴街道に
年老いた乞食が倒れた

湯の岳おろしに
街道はまだ白かつた
けたゝましい警笛をならしつゝ
乗合自動車は
それをよけて
走り過ぎた

闇

何時か夕闇は
このいたいたしい生の敗者を
まもるかの様に

包んでいつた
はるか石炭を燃す煙が
悲しげに明滅する
一九三〇年の
一月元旦の夜は暗らかつた

若さは逝く

鈴木 董

果敢なきは人生
時は瞬一瞬に過ぎ去つて行く
タイムは尊い人間の生命を蝕ばんで
吾等の若き青春を
此の世界から奪つて行くのだ

若さは逝く生きねばならぬ人間の
生の惱は至る處に盡きぬ
明日の生命さ知れぬ
陽炎の様に果敢ない人生！

若さは再び歸らぬ
此の肉の疼きよ！
靈の震のきよ！

(3)

朝

丹野晴夫

ひゝ――
ひゝ――
雲雀が鳴いてゐる
雲雀が鳴いてゐる
冷たい朝の
空気をふるはして
悲しそうに
鳴いてゐる

なんだか
俺の心は
朝の氣分から
遠のいて
何んもなく
悲しい氣に
充たされた

無題

高瀬 勝男

こぼ／＼と
急ぐ野道
ふと空を仰げば
朝の月が
くつきりと白く
浮いてゐる。

吹雪中を馳つて行く彼の風貌は若く元氣だ
眉間に疲と凍が見えるがそれも
彼の胸は吹雪の彼方太陽の日があるを確く信じて強い

兄弟よ

彼は吹雪の中で死んだ
まづたくこざされた闇の世界に死んだ彼の胸は高々と
聳へ音と共に吹きなぐる雪に衝いてゐる
骸の脇、赤い花が咲いてた春の日
老人が飢餓をまぬかれた
蒼い空の下、地表は時うたづ拓されてゐる。

(4)

歸り途

鈴木松琴

工場の汽笛に
夢を破らちやつた
やつぱりおらあー

一九三〇、一、一五、

ありのまゝに

相場虔一郎

月は冷たく冴え居た
静まつた夜の雰圍氣
七ツの星が
頭の上に來た頃

ぐつたり疲れた
おらあが歸る時だつた
死の様な陰惨な
恐怖を抱き
何かしきりに
考へ込んで居やがつた
お月様おれを嘲る様に
増々冴えた

破戒—憎惡—
何んにも無く成つた
昔の甘え戀が甦つた
.....

議會は解散だ
俺にはなんの不服もない
少數黨が天下をさつた時のそれが憲政の常道だつて
俺にはさつぱり解りやしない
ごころを叩いたつて空つぽだ
ほほ！とこゝろで又一杯飲めるんだ
こんな儲けが毎日あればいいな！
そつちとこつちに頼まれて
野越へ山越へ行つたんだ
義理固く
かた方の姓と片方の名を書いた
選舉違反であげられて

法廷の前で正しいと言へ張つて
止まなかつた彼奴つ、

鈍よりした空はもう見あきた
毎日すい臭くなつた飯は食つて居られねえ
いよく麒麟の子が生れるつて言ふ
あしたなんだ
ばつばさんお起ちなさい、光ちやんも隣の
おかみさんも、姉さんも
いつまでも彼奴等にはつかり儲けさせて
おくもんか、

をんな達にだつて
生活權はあるんだ
亡靈じやない、
歩くことは出来るんだ
さあ！皆んな手をとつて
デモンストレーションはさておいて
眞直に押掛けて行くんだ

だが待てよ！

(5)
働いて—喜こんで—悲しんで

俺達は毎日墓場へかよふんだ
戀人の聲が—いや妹の聲が
聴いるんだ、
たまには涙も出で来るよ
俺はたんとは望まない
ぐつすり昔の夢でもみたいなあ—
あり余る身代は眞平だ
だが——
あまり貪棒はしたくない
街のあつちこつちの間屋に
ぶらさがつてゐる大きな〇〇が片端から
ヴァン／＼と打壊れるといえな—
いつも子供でありたいな—

30・1・20

十月以後

松村

清

雜詠

安藤波二

裏庭に啼きはそめたる猫の聲畫ながら臥てき
くは寂しき

— 微羔 —

陽ざし來ればかぐろき上のゆげあげて濕りを
おぼゆ庭にしたてば

— 時化晴の朝 —

降り續くこの日もごろの日ぐせなり子はひこ
りてあそびあぐねつ

— 姪二首 —

片覺えの唄はひそかに聲にいだし獨りし遊ぶ
たぬしからざらむ

河地曳にゆく

干渴はも照らひまぼしくしらじらし陽はひる
乍ら寒き海風

入江の面波たたす海風の冷めたさやまともに
向き網ひきにけり

風雲の群れて河邊のうそ寒さみたる眼おもた
く鶉はさびゆけり

ことつめて深くは思ふにあるまじきねもごろ
に今日母としかたる

— 或る日 —

朝ぐもる日ぐせの空に風いでぬ息りになれ今
日も休みつ

— 風邪 —

笹鳴らすこの竹林の朝風に霧白々と吹き流れ
たり
笹の鳴りややに暮れば時雨雲竹林の上を絶え
ず狙狽す
寒に土蔵の壁に木々の影うつして赤し夕焼
けの空
夕の風吹き慕りに庭松の梢の雪は乱れ落ち
つつ
焼のみ社みちの闇ふかし通りゆく瞳に常夜燈
見ゆ
み燈りの静かに燃ゆる焼の社前に伏して心畏
るる
去年の闇ややに薄るるまなかひに雪を被ぎて
たたなはる山
元旦の空はれにけりこの鑛山の多くの機械鳴
りをひそめつ
夕潮のふかぶか満てるこの浦の岸邊の巖鷗む
れるつ

— 海邊巖 —

雜詠

水島三郎

已れをも先づ見極めて落ち付かぬ歌留多の歌
の知らぬ悲しき

飲み疲れた自分を夢に誘つてゐる静かな夜が
二時を刻んで

うなだれつ重き歩みの心哉酔ひしびれたる香
り勝るに

身邊斷章

下倉勢津子

悲しさに今宵の月の影淡したゝすむ我が身淋
しさぞます

なつかしき母の前にぞ寄りそふていはんこす
れば石の墓なり

人の世の悲しき事を三味線に歌ひひき行く人
ぞはかなき

しみじみと語りし友も別れ去りさびしき後の
虫の音をきく

このごろの我が身はいとどやつれたり思ひぞ
何か思ひざらまし

去年の秋別れし友の思ひでは夜汽車の窓にう
つる面も影
おもつかぬ心の偽りいで行けば晴ばれしたり
家も外も

日記の樣々

佐藤清長

眼覺むれば朝の陽ざしに霜解けの重たく耳に
落つる音きく

吹息するに暫しが程は白々と宙に横切る霜深
き朝

吾が心掴むも空し冬枯れの野道彷徨氣持輕か
らす

疑ぐるに疑ぐる程にこの心よ善し惡しともに
さだかならざり

掌の熱に熟るゝと及ばぬに疑つと考へ來れる
— 冬は寒いや —

かすかなる雨音きくになにやらむわが眠り行
く事のをしまる

この日頃飲み續けたる酒の香に捨て得ぬ惱み
あるをおぼゆる

雜 詠

渡邊 いわほ

支那そばの笛の音消しぬ除夜の鐘
若水に姿うつせる少女哉
自動車に飾り着けたり松の内
嚴打つ波静まりて御元日
分嬢も墨つけられし歌留多會
大雪や小鳥群れ來し水車小屋
橋負請杭打つ音や冬の川
柚の家雞炊鍋の模様けり
親無子一人淋しく手掬唄
初荷馬飾るや女房の添明り

蓮 沼 溪 風

大木の影ありありと冬の月
外風呂の硝子つめたき雲哉
鷄糞の乾くにほひや冬日南
霜解の畑に群れる雀哉
礎の香に若やぐ巖や初日の出

三 崎 英 夫

陽は暮れる焚火は消ゆる子等かへる
陽は暮れる鳥がかへる子等さわぐ
南縁に置かれた梅は紅くなつた
目覺むれば雨だれの音陽は昇る
雪の朝障子にうつる鳥のかげ
親なし子納豆のこえ凍りつく
のかされた子は泣く泣く壁に字を書く
オナノを弄ぶ子一人ぼっち
新しい着物きぬ子はのかされる

朝の聲納豆賣と小鳥かな
竹馬は陽さし來れば塀による
こち風ぞ知けにけるかや今朝の冷
泣く子等の涙干きてひびとなる

苦 悶

佐 藤 清 長

一切の執着を斷ち今こそ我れにかいるのだ、
梅 子 無言！ 唇をぐつとみしめて
敬之助 それが今日迄の凡てを淨らかに齎される只一
ツの道なのだ、明日を思ふがい、そして貴女
自身の心を克明に味ふべきだ、最早僕達の中に
介在するもの、一ツだに新しく掴み出す何物も
認められないのだ、信ずる事がありと認められ
ないのだ、遺された凡ての記憶は僕が生き続け
る限り、僕の身体に流れる血汐に染んでゐて岐
度忘れないよ。

梅 子 涙にうるんだ顔をもたげ

違ひます、違ひます。皆んな違ひます。妾の言
葉を貴郎は謂つてゐるのです、貴郎は妾しを知
らないのです、随分ひどい、……貴女は他人
の謂ふ事を信じて、妾しの謂ふ事を信じないの
ですは、

敬之助 激しく語をふるわし

何を謂ふのだ、今になつて迄僕を偽はろうとし

拾 ひ 物

吉 野 か ほ る

てゐるのか、なぜその口で自分を詫びないのだ
い、や詫びて貰ひたくない、が併し、(少し間をお
き) その口で犯した罪をなぜ悟らないのだ、僕
は口でこそ貴女を憎みこそすれ、心から貴女を
憎めないのだ、僕は(男の眼に涙が浮んでゐる)僕は
憎む事が出来得ない貴女を憎むもうとする心の
何處かに、憎もうとしてあせる自分自身を憎ん
でゐる事に氣がつくのだ、貴女自身の姿を憎も
うとする僕が、僕自身を憎んでゐるのは、(聲が
かすれる、躊躇してしまふ)……ねー介りますか
貴女の心にいゝや貴女の全体を、僕が信じて居
たからです、それが僕の心だつた。僕自身の
存在じやなかつたのだ。貴女と謂ふ尊ひ存在が
僕に貴女の存在を植え付けてしまつたからでし
たよ。(介れてしまふ)
驚きつ、併しなれば無意識に男の身に身体を投げかけ
梅子さん、最早何も言はないで下さい。一切が
明日の運命に従がふ丈です。恐らく昨日迄の
に立返る事が出来得なくなつた如く凡ては急に
考へ(問) そうですこれ以上語りあう事は
益々お互の感情を荒だせるばかりですからね
では永遠にさようなら！ (歩るき出す)

梅 子 敬之助

梅子 待つて頂戴！卑怯だわ、

敬之助 卑怯、これを卑怯と謂ふのですか、

梅子 (急に佇んで) 妾しが悪いのです。妾し一人が

黙つて居ればいいのでした、皆んな妾し一人の

悪い事でした。(顔で顔を蔽ふ、くする、如く泣き止れる)

勘忍して下さい。(男暫時その姿を凝視していたが、静かに跪き、女の手を握りしめる)

敬之助 梅子さんなぜ泣く、僕は貴女に詫びて載せた

くはない。寧ろ怒つて貰ひたい位だ、それが僕

の眞實の心だつたよ、三日前の自分だつたら何

事も貴女の謂ふ事を信ぜず、貴女が謂ふ如く、

自分決めた誤解を育て、いつたかもしれない。

併し今日の自分は心から貴女を求めてゐるので

す、が同時に貴女を新しく解放しなければなら

ぬ責任を思ふのです。そうする事が僕の最大の

自信を齎らされる結果になるのです。(間)

僕はいつまでも、いつ迄も今夜の僕を偽はつて

ゐたかつた。そうする事が三日前に貴女の家を

訪ねた軽率な行爲を恥じる唯一のお詫であつた

でしょう。でも偽はれない。他人が謂ふ如く漁

夫の利を占むる結果であつても、自分の眞實の

心を育てる道に進みたい。

梅子 (續りつく)

敬之助

でも凡ては耐へ忍ばねばならなくなつてしまつ

たのです。それより外に僕の生きて行く言葉が

なくなつてしまつたのです。苦しみ通して來た

周囲の嘲笑にさい、堪らない死をいくたびか貴

女の態度に魅がへつて居た僕だもの今後の嘲笑

なぞ意に掛けちや居ない。

分ります。あなたのお心は妾しが皆んな識つて

ゐます。でもあなたは妾しの全部を理解して下

さらなかつたんです、貴女から戴いた御手紙

だつて、妾しにはさつぱり譯が分らなかつたん

だもの、……返事を上げないのは妾しが悪い

んじやない、皆んなあなた御自分が悪いのよ。

そして一人決めた心から妾しをすて、しまつた

んじやないの。でも妾しは貴郎を憎みなぞしな

かつた。屹度亦あなたのオーバルが始まつてゐ

んだと思つた。この前だつて妾を随分偽はつて

たんだもの、妾しはそう思つてゐたのです。そ

れなのにあなたはそれつきり妾を見て黙つて

ゐたんですはね。

敬之助 (頭をか、へて起き上る)そして昂奮から醒めた顔を女の全身

後記

創刊號に松村氏を煩わして短歌論を載せたに
も不拘短歌の頁の寂しいこと、同人達の不眞面
もあることながら讀者諸氏も随分振はない。

俳句、僅かながら投稿された。一九二〇年誌
は諸君の研究誌である故に遠慮なく送つて呉れ
たまひ。

頭から何か滴り墜ちる感じがする松村氏
の「われもここに見れば歌をし詠み得ざる。木兎
はおかきものにこそあれ」の歌が自分なにな

かはつきりした意識に導びく。凡て見つめ、味
わふ迄の苦しみは、言葉でなぞ言ひ盡せるもの
ではない。假令は直進する列車に向つて飛び込

まふとしても、飛び込むんだと云ふ意識があつ
たなら、到底自殺なぞ出来得るものでない。眞
に藝術的本然に立脚してこそ自分が凡てを創造
して行けるのである。

這般來磐城新聞を利用して自己廣告をしてゐ
る二大詩歌人がある。就れも有名な人であるが
亦就れも無我な人達である 清長

もつと早く出す譯であつたが、餘り投稿が
少なかつた、同人の不熱心と言ふか、業務上
の多忙や、印刷所の都合で遂に今迄遅れてしま
つた讀者諸君にお詫びする。

すでに覺悟はして居る、いや今後も其の上だ
併し僕達は或る感激をおぼえる。

此んな小さなものでも——ちつとして居るこ
眼の中に熱いものが覺える。嬉しいんだ、たゞ
嬉しくてたまらないのだ、まだ新米の悲しさは
いろいろな事——失敗した事一つ一つ印象が大
きい。

併しいつまでも此の感激にのみ満足しては居
られない、常に最大の感激と同時に最大の冷靜
を持つことだ僕達は痛感して居る。

次に方々から會員の事で訪ねられた、會員は
本誌の賛同人であつて、寄稿は自由である、投
稿規定にある如く本誌發行支持費として毎月金
拾銭を納入することである。

其の他一般讀者からの投稿を歓迎する。
度一郎

投稿規定

- 一、一般投稿歓迎
- 二、會員は文藝誌發行支持費として一月金拾銭を原稿と同時に納入のこと、
- 三、原稿は可成一篇を望む
但し和歌、俳句、は數篇も可
- 四、内容、詩、和歌、俳句、小説、戯曲、評論
隨筆、感想等々
- 五、宛名、平町立町四十五
- 六、締切毎月二十日限り
住所姓名を明記のこと
- 七、編輯は編輯部に一任されたし

以上

昭和五年一月廿一日印刷納本
昭和五年二月一日發行
【頒賃金拾銭】

編輯 人 相場 度一郎
印刷所 平 活 版 所

福島縣石城郡平町一丁目廿九番地

印刷所 平 活 版 所

發行所 一九三〇年誌

